

タイトル	J. J. ボードマーの詩学における「想像力」：18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷についての一考察
著者	北原，寛子；KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(178)：91-106
発行日	2019-03-25

J. J. ボードマーの詩学における「想像力」

—— 18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷についての一考察 ——¹

北 原 寛 子

文学作品の創作が「想像力」Einbildungskraft に基づいてなされることは、われわれにとってすでに了解事項である。それはアリストテレスが『詩学』において、「歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語る」²と指摘していることから当然に思われる。しかしこのアリストテレスのことばから「想像力」を思い浮かべることは、現代の常識にとらわれていることに起因する可能性がある。アリストテレスは先の引用に続けて、「[...] 詩作はむしろ普遍的なことを語り、歴史は個別的なことを語る[...]。普遍的とは、どのような人物にとっては、どのようなことがらを語ったりおこなったりするのが、ありそうなことであるか、あるいは必然的なことであるか、ということである」と指摘している。ありそうなことを考えることは、現代では想像力の範疇に含める。しかし精神的な活動は、論理的に根拠を重ねて発展させる思考か、論理的飛躍を許容する想像か、実際は線引きが困難である。区別する上で基準となるのは、論理性をどのように判断するかに関わるが、そのための基準が時代の影響のもとに成立しているとするれば、歴史的に総括する際には困難が伴うことになる。現代における広い意味での想像力は、18世紀前半には思考の一種と解釈されていた。なぜならば「奇跡」Wunder などの宗教的な現象が、論理性の範疇に数えられていたからである。一方個人の独自性による想像力は、「うつろな影であり脳が紡ぎだしたもの」leere Schatten und Hirngespinnst³とも形容され、実体も根拠もない幻であるとして否定的に捉える意見が優勢であった。18世紀のドイツ語圏における数々の詩学関連テクストを読むと、「想像力」という概念が、虚偽やはかない夢といったネガティブなイメージで語られていたことがわかる。⁴ 今日では内面世界の豊かさを表す肯定的なことばと受け止めら

¹ 本論は、下記研究プロジェクトの一環であり、科研費の支援を受けている。18K00458 2018年度基盤研究(C) 18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷および内面描写の成立についての研究(研究代表者北原寛子)

² アリストテレス『詩学』第9章、『アリストテレス「詩学」ホラーティウス「詩論」』松本仁助・岡道男訳 岩波書店1997年、43頁。

³ Johann Jacob Bodmer: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie. Faksimiledruck nach der Ausgabe von 1740. Mit einem Nachwort von Wolfgang Bender. Stuttgart 1966, S. 149.

⁴ 近代ドイツで起きた小説反対運動では、小説は想像によって書かれたただの嘘にすぎないという意見があった。この立場の代表的な論客は、本論で中心的に取り上げるボードマーと同じチューリヒで一世代前に活動したゴットハルト・ハイデッガー(1666-1771)である。ハイデッガーの小説理論については次の拙論ですでに取り上げたので、今回はその時の結論を前提として考察を進める。北原寛子「ゴットハルト・ハイデッガーの小説批判 — 17世紀末の小説論争についての一考察 —」小樽商科大学『人文研究』第133輯(2017年3月)、59-77頁。

れており隔たりがあるが、それはつまりイメージが変化し、移り変わる時期があったということの意味している。

18世紀半ばの詩学で想像力について重要な議論をした人物に、いわゆるスイス派と呼ばれ、チューリヒで活動したヨハン・ヤーコプ・ボードマー(1698-1783)とヨハン・ヤーコプ・ブライトンガー(1701-1776)がいる。2人はともに地元のギムナジウムで教鞭を執り、さらに共同で道徳週刊誌「画家の談話」Discourse der Mahlern(1721-23)を発行したり、『ニーベルングの歌』をはじめとする中世の叙事詩を発掘したりするなどの活動をおこなった。スイスにおける彼らは、「啓蒙の教師」として、その著作物を通して芸術の諸分野や道徳などの領域で、批判精神を発揮して社会全体の意識の洗練に貢献したとして高く評価されている。⁵ドイツ語圏全体に対して彼らが注目を集めたのは、ライプツィヒを中心に活動したゴットシェートと論争を繰り広げたことによる。しかし最終的に双方は、ドイツ語という言語や文学における趣味の洗練をより一般に広めるべきであるという点で、アプローチの違いよりもお互いの共通点を確認することになり、宥和するに至った。彼らの論争が、しばしば何のために論争をしたのかわからないという批判を受けることになった理由の一つには、この最終的な合意があると考えられる。

スイス派とゴットシェートの立場の当初の違いは、イギリス支持かフランス支持かで区別することができる。フランスでは調和と明快さを好む傾向があり、現実を観察し、分析して把握するという点で当時の啓蒙主義思想と共通している。一方イギリス支持派の特徴は、現実よりは内面性を、秩序よりは自由や理想の制限ない追及を重視することにある。ゴットシェートは『批判文芸試論 第四版』(1751)において、彼が文学の原形と考える教育的な寓話をはじめ、悲劇や喜劇、叙事詩などの韻文文学と、小説などの散文文学、さらにオペラなどの舞台芸術について、各ジャンルの特徴を体系的かつ規範的に示した。一方スイス派ボードマーは『文学における奇跡についての批判論』Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie(1740)(以下『奇跡批判論』)⁶や『詩人の詩的絵画についての批判的考察』Kritische Betrachtungen über die poetische Gemälde der Dichter(1741)において、あるいはブライトンガーが『批判詩学』Critische Dichtkunst(1740)などの多数の著作によって、創作・受容をふくむ文学全般での精神的な要素の重要性を訴えた。このようにスイス派の主張は、ロマン派から20世紀にいたるドイツ文学の特徴を準備したという点で、大きな意味を持っている。⁷しかしその意義が正当に認められているか

⁵ Vgl. Volker Meid: Nachwort. In: V. M. (Hg.): Johann Jakob Bodemer, Johann Jakob Breitinger, Schriften zur Literatur. Stuttgart 1980, S. 371.

⁶ 書誌情報については、Anm. 3を参照のこと。また以下の引用に際してはCAWと略記してページ数を併記する。

⁷ スイス派をのちの疾風怒濤時代の天才論につながったとする見方は次の研究である。

Vgl. Karl-Heinz Stahl: Das Wunderbare als Problem und Gegenstand der deutschen Poetik des 17. und 18. Jahrhunderts. Frankfurt a. M. 1975. 天才論は、作品の完成度を詩人の個人的能力の表れと考える発想である。現代のわれわれにとってはあまりに当然の発想だが、本論でこれから考察するように、18世紀後半までは虚構の世界も現実と同様に神の統治下にあると考えられ、歴史との区別も進んでいなかったため、当時としては革新的なアイデアであった。Vgl. Werner Hahl: Reflexion und Erzählung. Ein Problem der Romantheorie von der Spätaufklärung bis zum programmatischen Realismus. Stuttgart, Berlin, Köln u. Mainz 1971. これらの研究では、

といえば疑わしい。なぜなら、文学における精神的なるものは、この分野が成立するにあたって当然の前提のように思われており、明確に意識されにくいからである。そのためにゲーテが述懐したように、何のための議論だったのかがよくわからないと批判されたと思われる。⁸そこで本論では「想像力」という概念を中心に、文学における内面性がどのように議論され理論的に発展したのかについて、『奇跡批判論』を中心に分析し考察を進めていくことにしたい。

本論が18世紀のドイツ文学における「想像力」に注目するのは、これが文学における内面描写の形成を理論的に導き出したという仮説を立てているからである。内面描写は18世紀末以降ドイツ小説の特徴となり、19世紀にはやがてドイツ市民を精神面から支える柱へと成長した。想像力は、個人が独立して自由に思考することができるという自覚が生まれた時に、ようやく人間の中に新たに発見された能力である。小説が描写の対象にした登場人物の内面世界は、一人一人が独立した精神を持ちうることを前提としなければ認知されることさえあり得ない。ボードマーの著作は小説ではなく叙事詩について考察している。ブランケンブルクの『小説試論』(1774)などをはじめとする当時の小説理論を読むと、小説が新興のジャンルとされ、文学として正当に認められるための努力を重ねていた一方、叙事詩はホメロス以来の、つまり2000年以上の伝統をもつ文学の本流と考えられていたことがわかる。そのため叙事詩に関して行われていた議論は、18世紀当時では詩学の中心的課題であったといえ、小説理論の形成にも影響を認めることができるのである。

1. ゴットシェートによる『奇跡批判論』評論

ボードマーの『奇跡批判論』について興味深い点はいくつかあるが、そのうちの一つは英国の詩人ジョン・ミルトン(1608-1674)が1667年に発表した叙事詩『失樂園』をめぐって、言語圏の枠を超えて展開された文学論争の一部を形成していることである。この叙事詩の評価は、同国の文筆家ジョセフ・アディソン(1672-1719)⁹が雑誌「スペクテーター」で1712年に発表した評

「奇跡」や「想像力」といったスイス派がキーワードに掲げた概念を取り上げており、本論はそれに続くものである。しかしスイス派の主張の新しさは当時の人々にも理解されなかったように、一見したところでは目新しさに欠ける。本論ではそれぞれの概念の歴史の変遷を考慮しつつ、新しい特徴が際立つように論述するよう努める。

⁸ 例えば若い頃にこの論争を一読者として知っていたゲーテは、『詩と真実』第二部第七巻に次のように書き記している。「スイス人たちがゴットシェートの相手役として登場した。しかし彼らは相手に勝ることは別のことをしなければならなかっただろうに。そうすればわれわれも彼らが優れていると耳にしたことだろう。プライティンガーの『批判詩学』は手に取ってみた。そこでわれわれは広い野原に出たとしよう。しかし本当は比較的大きな迷路にいただけで、われわれが信頼している有能な男性が、われわれをぐるぐる連れまわすと、ますます疲れ果てていくのだった。さっと見通す言葉があればよかったのだろうが。詩論そのものについては、基本原則が見つけられなかった。」(Johann Wolfgang von Goethe: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Bd. 9. München 1988, S. 262.)

⁹ 「タトラー」(1709-11)や「スペクテーター」(1711-12)といった雑誌などによって、市民に道徳や文化に関わる事項を分かりやすく説いた定期刊行物の発行を始めたことでも知られる。これらの雑誌はドイツで翻訳され、やがてオリジナルの出版が目指されるなど、ヨーロッパ各地に広く大きな影響をもたらした。

論によって不動のものとなった。しかしその後フランスで、ミルトンの作品に異議が出された。ボードマーの著作『奇跡批判論』は、アディソンの評論をドイツ語翻訳して収録することで擁護しつつ、フランスからの非難に応じたものである。さらにゴットシェートは、それらのイギリス、フランス、ドイツ語圏のスイスへと渡ってきた議論を踏まえた上で、ボードマーの主張に対抗している。ボードマーがイギリスからの主張に賛意を表している一方で、ゴットシェートはそれらに反論することでフランス派と同じ陣営に立っており、彼らの対立はここでも顕著である。そこでまず、この一連の流れで最後に当たるゴットシェートによる「ヨハン・ヤーコプ・ボードマーの『文学における奇跡批判論』論評」¹⁰を取り上げる。

ボードマーはミルトンの『失樂園』をドイツ語圏に紹介すべく、作品をドイツ語に翻訳して1732年に発表していた。しかし芳しい評判を得ることはできなかった。これはボードマー自身も認めており、『奇跡批判論』の前書きで述べている。ゴットシェートは、ボードマー自身が『失樂園』に人気が出ないとして挙げている理由を、さらに3点にまとめて紹介している。まずはドイツ語の響きが硬く、原語である英語の柔軟性には及ばないことである。次にドイツ人に遊び心が足りず、哲学的に、つまりまじめに考えすぎるので面白さを理解することができないからだという。そして最後にドイツ人には芸術を理解する自由な精神に欠けているからということである。これらの理由に対して、ゴットシェートは「良い本はおのずと有名になる」¹¹と掲げ、不人気の根拠は作品そのものに内在していることを主張する。

ドイツ語の響きの問題に関して、ゴットシェートは「もしわれわれが、そもそも論者氏に対してすべての翻訳の弱点を容認したとしたら、どうしてダツィア女史に対して、彼女が散文で翻訳したにもかかわらず美しく仕上げたことを責め立てるのか、わけがわからなくなってしまうだろう」¹²と、ホメロスの散文訳を引き合いに出して、ドイツ語であることも散文訳であることも、作品の完成度にとって否定的な要因にはならないはずであると主張する。近代のドイツ語の書き言葉は、マルティン・ルターが1522年に発表した『聖書』のドイツ語訳にさかのぼるとされる。ラテン語の直接の子孫であり、ダンテやタッソーを輩出したイタリア語や、宮廷文化とともに貴族の娯楽としての文学も栄えたフランス語の後塵を拝しながら、ドイツ語でも響きの美しさを追求する文学のための言語として努力が積み重ねられていた。16世紀後半になるとマルティン・オーピッツらが文学作品の翻訳や実作を試みてドイツ語が近代語として文学の分野でも発展した。こうした歴史的な背景を考慮すると、ゴットシェートが、ドイツ語に難があり英語からの翻訳が困難だったとボードマーが嘆いたことに同意しかねたのも無理からぬことである。

¹⁰ Johann Christoph Gottsched: Rezension über Johann Jacob Bodmers >Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie<. Eigentlich in: Critische Beyträge. 6. Band. 24. Stück. Leipzig 1740, S. 652-668. In: J. Ch. G.: Schriften zur Literatur. Hrsg. von Horst Steinmetz. Stuttgart 1972, S. 239-252.

¹¹ J. Ch. Gottsched, a. a. O., S. 241.

¹² Ebd., S. 247.

さらにゴットシェートは、「言語の柔軟性に関するならば、外国の話し方に合わせるために言葉が堅苦しく柔軟でないというのは、おそらくドイツのかなりの地方では当てはまることだろう。しかしドイツの翻訳は、彼らの基本的な書籍が美しさと強さでは決して引けを取るものではないことを示したので、そもそもこのようなことを排除してはならないのだ」¹³と続け、方言の問題を指摘する。当時のドイツ語圏は、政治的には領邦国家が神聖ローマ帝国によってゆるやかに結び付けられている程度で、統一した国家としての意識が低い状態にあった。移動や通信の手段も、馬車の定期便を核とした当時なりの発達段階にあったとはいえ即時性など望むべきもなく、文化には地方の独自色が強かった。そこで格好の批判対象となったのがスイス派であった。ゴットシェートは、このような表現によって、スイス・ドイツ語を標準語からは劣るものと批判したのである。一方的に周縁とみなされたスイスの知識人が強い不満を抱いたのは当然であろう。

そして第二の理由に対しては、ゴットシェートは次のように述べている。

論者は、ドイツ人は哲学しすぎると述べている。「ドイツ人の根本的学問や抽象的（一般的）真実への好みは、彼らを最近あまりに理性的で閉鎖的にしているので、彼らは同時に退屈で無味乾燥になっている。わかることの楽しみが彼らの心をすっかり占有してしまっており、そしてこれが想像力の楽しさを抑圧してしまっているのだ」と。これは小さな問題に見えないとしても、ドイツ国民にとっては恥ではない。しかしミルトンの作品にとってもかなり名誉になっているとは言えない。¹⁴

ドイツ人がミルトンを評価しない理由は、ドイツ人にとっては長所と受け止めるべきだと反論している。興味深いのは、ここでゴットシェートがドイツ文学の精神性についてはあまり深くコメントしようとはせずに、想像力という概念にあまり関心を示していないことである。ロマン派以降のドイツ文学の特質は、先に指摘したように精神性の追求である。¹⁵ 18世紀中期の権威者であるゴットシェートでも精神性にこの程度の低い関心しか示していないということは、精神性への関心がその後数十年で急速に増したということの意味している。また逆に、その後重要であり続けている特性でさえ、1740年代初頭には、ようやく意識され始め、関心の対象に上ったばかりだったという状況が浮かび上がってくる。

第三の理由に対してゴットシェートは、ドイツ人が芸術を理解できないのではなく、作品の構想やテーマ、登場人物やその関連づけがこれまでになくどくどくしており、聞く者に不快感を及ぼ

¹³ Ebd., S. 247f.

¹⁴ Ebd., S. 246.

¹⁵ 19世紀の哲学者ショーペンハウエルは、『芸術と美学の形而上学』228章に小説は精神的であるほど高貴になると書き記し、20世紀前半に活動した偉大な小説家トマス・マンはドイツ人の特性が精神性にあり、発展小説という独自のジャンルを発展させたと繰り返し述べている。

すため好意的に鑑賞できないのだと反論している。ミルトンが描いたような地獄や混乱、死や罪といったものを「とてつもない想像力」¹⁶をもってして評価できるとするならば、魔女や悪魔でさえ賞賛されるに違いないと、そもそもミルトンの作品自体が評価されるに値しないという立場をつらぬいている。ゴットシェートにとって想像力とは非現実的で奇異なもの、奇怪なものを強調するための技法としか受け止められていないこともわかる。一方ボードマーは、ドイツ人はホメロスやタッソーは手放しで賞賛するのに、ミルトンを理解できないのは、芸術的に理解する能力が欠けているためだと嘆いている。ゴットシェートはこの意見に不服を申し立て、アディソンが自国の詩人ミルトンに見出したような魅力をボードマーも自国の詩人たちに見つけられるように努めるべきであると皮肉に指摘した。¹⁷

ゴットシェートがミルトンの作品を受け入れることができない理由として挙げた3つの理由は、どれも18世紀半ばの文学のあり方に密接に関わっている。文学に用いる文体が小説の発展により韻文から散文へと大きく切り替わっていく中で、文学を受容する態度も変化し、声に出して読まれるものから、黙って目で追う文字列へと変化し、この黙して眺める文字列がどのような情報を読者に提供するのか、何がどのように描写されるのが重要性を増していった。それは読者にとって、文字列からどのようなイメージが喚起されるか、ことばの響きの心地よさよりも、何を語るのか、その内容がより大切になることを意味している。『失樂園』はたしかに韻文で書かれているが、同時にゴットシェートが戸惑う程度に、表現の斬新さも備えていた。『失樂園』はドイツ人には時期尚早だったとボードマー自身は記しているが、文学史をさかのぼって考察すると、ボードマーの指摘は妥当だといえる。しかしボードマーは意図して旧体制を改革したのではない。それどころか、従来の方針を継承することだけを考えていたと思われる。継承を正当化するために論理的な説明を行うなかで一線を越え、本質的な変化をもたらしたことを以下に論じていきたい。

2. 詩的表現と合理主義の間で

18世紀の詩学で言う「奇跡」Wunderとは、通常神々のおこないを指している。ミルトンの作品は、『旧約聖書』創世記のアダムとイブの楽園追放が題材となっている。イブに知恵の実を食べるようにそそのかす蛇は、実は天国を追われた悪魔の化身だったということになっており、その出来事にいたる悪魔と天使の駆け引きが壮大なスケールで描かれている。「天使」「悪魔」「天国」といった神に関わることがらが描かれおり、ボードマーの著作は文学における奇跡の描写について議論(=「批判」)していることになる。

ボードマーは『奇跡批判論』で、コンスタンティン・マーニ Constantin Magni¹⁸による『ミルト

¹⁶ J. Ch. Gottsched, a. a. O., S. 250.

¹⁷ Ebd., S. 245.

¹⁸ この人物について調べてみたが、得られた情報はとても少なかった。『奇跡批判論』再版のヴォルフガング・

ン「失樂園」批判論』Dissertation critique sur le paradis perdu (1729) と、ヴォルテール (1694-1778) が叙事詩『ラ・アンリアード』 ロンドン版 (1728) に付した論文「叙事詩論」Essai sur la poésie épique に反論しながら持論を展開している。それらのテキストのいろいろな箇所と言及しているが反発している点を要約すると、フランスの論者たちが作品の枠組みの外にある基準を用いて解釈しようとしていることへの反発と、さらに彼らがミルトンはキリスト教の神聖なで高貴な存在を人間と同じように描いたと非難していることの2点である。

作品の枠組みの外にある基準とは、聖書や歴史、その他もろもろの物理法則など、『失樂園』に内在せずに、現実には人々の判断の基準とされていることがらである。例えば、ボードマーは次のようにヴォルテールの指摘に立腹しつつ言及している。

ヴォルテールが、落ちたり倒れたりする箇所のくだらなさに腹を立てるとするならば、そしてその描写が落下した天使の弱さを示しているはずだとするならば、落下した後に気絶することだけが落下を卑しいものにして示してみよ。しかし天使は、落ちたところで気絶はしないのである。(CAW 70)

天使が落下するエピソードとは、『失樂園』の冒頭で野心と傲慢さから全能者に戦いを挑んだ天使が、天からあえなく突き飛ばされて焔に包まれた地獄へと落ち、まる9日間起き上がることができなかったと語られる数行の部分の指している。ボードマーの記述からヴォルテールの主張を再構成するならば、なぜ天使という特別な存在がそもそも高所から突き落とされなければならなかったのかに疑問が呈されたということになるだろう。突き飛ばされるような天使はその程度の弱い存在にすぎず、そもそも天使としての本質を無視しているのではないかと指摘されたと推測できる。ボードマーは、天使は気絶していないと反論しているが、『失樂園』を参照すると「この世の人々の計測によれば、まさに九日九夜、／凄惨無慙な仲間とともに、不死の身とはいえ完全に／打ち拉がれて、燃え立つ深淵のさなかに敗残の身を横たえ、／のたうちまわっていた」¹⁹とある。数日間起き上がれなかったと書かれていることから、墮天使たちが気絶したと解釈することは可能であり、ボードマーに分が悪いように思われる。しかし肝心なのは、同じエピソードに

バンダーによるあとがきには、Constantin de Magny とあり、書名もその情報に基づいている。この氏名を手掛かりにインターネットで検索すると、ようやくヴォルテール財団によるインターネットプロジェクト「ジャーナリスト辞典 (1600-1789)」で「クロード・フランソワ・コンスタンティン・ド・マーニ」Claude Francois CONSTANTIN DE MAGNY (1692-1764) という人物に行き当たった (<http://dictionnaire-journalistes.gazettes18e.fr/journaliste/190a-claude-francois-constantin-de-magny>)。このインターネット辞典の記載によると、彼が生まれたのはジュネーブ近郊のレニエである。ベルギーのルーバンで法学を学び、その後トリノやパリなどで大学教員や大貴族の図書館司書といった職を得ながら執筆を行い、最後にスイスに戻りローザンヌで活動したということである。つまりマーニはボードマーと同時期に活動している同国人である可能性が濃厚である。しかしフランス語の著作であるため今回は「フランス」に組み入れる。多言語国家スイスの状況は非常に複雑で興味深いだが、当時の文化状況のより詳しい分析は別の機会におこないたい。

¹⁹ ミルトン『失樂園』 平井正徳訳、岩波書店 1981年、(上)9-10頁。

対する両者の反応の違いである。つまり高貴な存在であることをやめて突き落とされる程度の天使には神聖な存在としての権威を認めないとするのか、あるいは戦いのすさまじさを強調した詩的表現として受け取るかの違いである。ヴォルテールは提示されたことがらを客観的な基準に従って判断する冷静な態度を貫いており、その点で合理的だといえる。しかしボードマーは、ミルトンが提示した飛んだり跳ねたりする躍動感はそのままだに受け入れ、そのことをことばで言い表した点に価値を認めているのである。同じ対象に際して作者が提示した内容を自らの物差しで測りなおして判断するのか、提示された内容に外部の判断基準は設けず、反対に内容の内的自律性や思い切りのよさを評価するかで両者は正反対の態度を示している。天から突き落とされた悪魔についてボードマーはマーニのコメントも紹介しているが(CAW 117)、それによるとマーニは、悪魔も神から不死や痛みを感じない超絶的な性格を付与されているはずなので、高所から落下したからといって痛みを苦しんでいるのは、設定と描写の間に矛盾が生じていると主張しているという。マーニもヴォルテール同様、詩人に提示された内容に対して距離を保ち、作品世界が客観的に構築されているか否かに関心を寄せているのがわかる。そのようなマーニに対して、ボードマーは作品を明瞭に把握しておらず、ゆえに彼の解釈は間違っていると指摘して非難の姿勢を明確に示している。(CAW 104)

ボードマーは、ヴォルテールがミルトンの作品に不当な評価を下している例として、さらに次のような指摘をしている。

争っている天使たちによって天国の大気を貫いて投げつけられる山を、ヴォルテールは同様に拙い比喩でもって攻撃している。彼が言うに、「6 シュー (約 180 センチ) の厚さのある岩の鎧を身に付けていたであろう山で武装した天使たちは、ラプレーのディプソード人たち²⁰にあまりにも似ている」と。ミルトンは天使たちに岩を鎧にして身に付けさせたのではなく、武器に対抗するために使わせたのだから、ここで検閲官の不誠実さが一目で露呈している。(CAW 73)

天使が山を投げつけるエピソードとは、『失樂園』第六巻の描写を指している。ヴォルテールは、天使と悪魔が巨大な山を動かすことを問題にし、大きさを誇張した表現に対してその不自然さを指摘している。巨大な姿にラプレーの描いた巨人を対比させることで、誇張のために荘厳さを超えてしまい、諷刺に通じるおかしみさえも醸し出されていると言わんとしている。ここでもヴォルテールの姿勢に見えるのは、合理的な判断基準に照らした評価である。そもそもヴォルテールは、想像上の戦争ならば数ページの説明で足りるはずだと指摘しているという。(CAW 13) 実際の出来事ならば、長大なことばを費やして記録する価値があるが、一方でただ頭の中で思い浮か

²⁰ ラプレーの『ガルガンチュアとパンタグリユエル』(1532-64)に登場する主人公と戦う巨人たち。

べたことならばそれほど多く語らなくても十分足りるはずだというヴォルテールの判断には、やはり合理主義的な価値基準が貫かれている。こうして彼は作品の枠を超えた基準を適用し、神々の偉大さを表すための描写を極端にすぎるとして否定的にとらえている。対するボードマーは、全知全能の神が人間をはるかに超えた能力を天使に与えているのだから、天使が山を投げることも妥当なのだと主張し、作者の意図を尊重しようとしている。

しかしこれは、ボードマーがすべての矛盾をただ黙って受け入れるだけの受身の態度をとったということの意味しているのではない。反対に彼は積極的に、作者が自由に考える権利を守ろうとしているのである。そのことについては、次の引用箇所にも明白に表われている。フランスの論者たちのミルトン批判で第二の特徴といえるキリスト教の高次の存在を人間と同等の存在に描いたことに対する否定的な意見として、次のマーニによるものを例に挙げたい。

彼 [=マーニ] は、天使たちが悪魔たちを火の海へ導き入れる第十八頁²¹ について、次のように述べている、「ここで霊的な存在が肉体を備えた存在へと変わっているのをご覧いただきたい。彼らに頭や目や、そのほかの肉体があるのだ。そしてそれに伴って詩人は、それらの大きさの程度を決定しているのだ、畑の区画に避難所を求めることになっているのだ。詩人はもっと多くのことをやってのけている。それはあたかも、詩人が意図的に自らをアレゴリーによって救済する権利を得ようとしているかのようである。詩人はそれらのとてつもない大きさゆえに神話的な寓話を名指ししてそれらと比較しながら、われわれにそれが本当の肉体であると非常に念入りに確認しているのだ。」

ミルトンが天使たちを、肉体を備えた、しかも人間的な姿で描いたことは確かなことである。詩人は、これらの目に見えない霊たちの性質や存在について形而上学的な論文を書こうとしたのではなくて、十分に考え抜かれた教育的なイメージにあふれたファンタジーを心地よい方法でとらえることを意図して、この作品の中で文学が許す自由を行使しているのだ。(CAW 31)

この部分で問題となるのは、まずキリスト教における霊的な存在を文学で扱うことについてである。マーニは、天使たちが偉大な存在であるにもかかわらず人間に似た肉体を備え、飲み食いや踊りなど人間同様の振舞いをするということについて疑義を申し立てているのだという。(CAW 40) これに対してボードマーは、聖書における詩篇の詩人の描写を根拠に、神は人間を天使よりもいくらか低く造っただけなので、私たちは優美さや敏捷さを容易に推測でき理解できるのだ、という立場をとっている。(CAW 16) 人間は天使に似ているという意見は、人間を霊的な存在に比肩したとみなすことも可能であり、不遜ともいえる。しかしボードマーは自らの敬虔さに疑念をさ

²¹ ここは『失楽園』第一章の地獄の描写を念頭に置いているものと思われる。

しはさむことはなく、文学には物事の性質を、きわめて卑小なものでも、いわんやこの上なく高貴なものでも、変えてしまう権利はないと、価値のヒエラルヒーに関しては文学も現実と同じ基準が適用されるべきだという見解を示している。人間の姿をしてこの世に現れたとされる神の子を引き合いに出しつつ、もし神そのものがキリスト教の文学に登場することがあるとすれば、神が受肉することもあるのだから、霊的な存在が人間の姿をしていることも間違いとは限らないとの趣旨の記述をしている。(CAW 63) いずれにせよボードマーは真面目に神を敬う気持ちを抱きつつ、教えを遵守するよう努めているのである。だから彼が聖書の記述を参考にしさえすれば、目に見えないことや不死についてさえも想像が可能であり、知ることができると主張していることも、彼なりの敬虔さの範囲にあったといえるであろう。(CAW 17) 聖書の詩篇詩人たちの記述はたしかに断片的で一面的でもあり、体系的に述べられることはないという留意は示している。しかしそれらが冗長であったとしても、その中に理解の手助けとなる豊富な情報が潜んでおり、われわれ解釈者が思慮深くこれらの出典から多くのことを導き出しうるのであり、結果的に天使の本質と行為についての知識を、然るべき体系になるように再構成することができるという持論を展開している。キリスト教的敬虔さを保ち続けることが、詩人にとっても読者にとっても大切なことであると何度も述べている。それは次のとおりである。

キリスト教が広まって以来、思考力は宗教の純粋な光の下でたくさん明るく照らされたのだった。だから今日神話的神学を固く信じていると言い張る人がいたとすれば、彼の信仰は流神と言われ笑いものになることだろう。芸術を解する人々の集まりでは、教会の宗務会議で非難されるように、すぐに野次られてしまうことだろう。(CAW 200 f.)

ボードマーは宗教の権威に積極的に従順である。もし表立って反抗していたとしたら、当時の社会状況では読者からは非道德的だと非難され支持を得ることは極めて困難であったと容易に推測できる。また彼は、世間体のために権威に恭順の姿勢を装いつつ平気で嘘をつくといった本心と表向きの姿勢を乖離させる器用な態度をとることもしていないはずである。これほど注意深く振舞っているにもかかわらず、彼の解釈は神の領域への侵犯であり、権威の喪失へとつながる行為であった。その理由は、彼が自ら解釈し思考したから、つまり積極的に想像力を持ち出してきたからである。「文学が許す自由」とは、文学の中で詩人が表現の自由を追求する可能性を示唆している。さらにそれを突き詰めれば、創造主として振舞うことを意味している。しかしボードマーは自らの主張が神の権威への侵犯につながることにについては自覚がない。反対にヴォルテールのように、文学作品の世界に自己を埋没させることなく冷静に距離を保つことに対して、理解できないものを受け入れる能力がないのだという非難を繰り返している。

ヴォルテール氏が天国の戦争や、そしてそれと同時によい天使と邪悪な天使を登場させて

いることを非難しているもう一つの理由は、反感によるものである。だから彼は腑に落ちないものすべてに反対する人々に責任を負わせている。この第二の理由は、次のように総括するならば、おおまかに最初の理由と共通している。つまり、天国の戦争は想像の産物であり人間の性質を凌駕しているので、その戦争は数ページで十分のはずだということである。なぜならわれわれは性質からして、腑に落ちないものを非難するものだからである。私はこの芸術審判者へのために、言っておかなくてはならない。彼は想像力を掻き立てる題材をたんに非難しているのではなく、要するにやめさせようとしたのだと。(CAW 19)

ヴォルテールは想像力を虚ろな騒ぎとみなして、文学作品の価値を下げる否定的な要素としていたが、一方ボードマーにとっては詩的な領域で想像する自由を確保することが最優先課題であった。彼は想像力を目に見えない存在も身近に感じさせてくれ、その点で宗教を補完すると受け止めている。そのため聖書の霊的存在が文学に登場することにヴォルテールやマーニが疑念を呈している点で、ボードマーの目には彼らが理解力不足で、敬虔さが足りないように映っている。しかしこのように非難されたヴォルテールとマーニによって代表されていたフランス陣営の議論でも、キリスト教の文脈で妥当とされている天使などの存在や体制に対して異議を唱えて無神論に陥ることは決してない。ただ歴史や科学などの現実と同じ価値観がミルトンの作品の中でも適用可能かどうかについて判断しようとしているのである。フランス派の非難は、バロック時代ならばアレゴリーとして許容されていたであろう詩的な無秩序に対して向けられており、それまでは無意識に受け入れられていた描写の数々を、一旦冷静な眼で観察したために生じたものである。結果的に文学世界の出来事に現実と同じ秩序と価値観が当てはめられることになり、豪放磊落な描写が非現実的であるという判定につながり、神が想像力の世界に登場して奇跡をおこなう余地を否定することになった。一方でボードマーはバロック時代のアレゴリー的な大胆な出来事の展開を詩的自由の名のもとに肯定的に受け取っている。しかし彼の態度は、バロック時代の人々と決定的に異なっている。それは詩人が、また物語の受け手が、考え、想像する意識を明確にした点である。思考する・想像するという主体性が人間を神の支配にとどまりきらない存在へと変質させ、人間自身が虚構の世界を治めることを可能にしたのである。人間が神を目指し、凌駕し、追い払うことへと結果的にいたってしまうのである。

現代の感覚では宗教も現実にも存在しないことがらを対象としているため、ある種の想像力の産物であるとみなしうる。しかし宗教は特定の個人の想像力によるのではなく、言葉を通して共同体で共有され、それが世代を経て継承されてきた。次から次へと伝えられていく中で、一個人の想像も事実や現実と区別があいまいになって混然一体となる。そのように伝承が繰り返されていくなかで、最初は空想であった事柄が、「語られた」ために語られた「事実」へと変貌を遂げ、やがて内容そのものまでが歴とした「事実」として大勢から認定されることになる。ボードマーが目に見えない聖なる存在の世界を想像力によって認知しようとした努力は、こうした伝承の延長

線上にある一過程である。しかし、この延長において人間が自発的に考えることで、聖書に関わらないエピソードにおいてもこの方法が援用され、想像力の領域で神々が行うことのできた奇跡の権利を、人間である詩人が担当することになり、結果として神に奇跡の業をおこなう余地をあたえないことに、つまり神から奇跡を奪うことになったのである。

3. アレゴリーから想像力へ

アレゴリーはバロック文学の重要な技法である。ボードマーは「一度で二重の意味を持ち、1つは隠された秘密の寓意的なもので、もう一方は単に表面的で歴史的である」²²と説明している。物語の展開に応じて「死」や「美」などの抽象的な概念を暗示する人やものが登場することを指している。また全能の神がこの世に働きかけをすることもアレゴリーを通して語られる。ボードマーも「アレゴリー的な表現方法は、抽象的なことを含みうる意味深長な精霊のためだけではなく、想像することに慣れた人たちのためでもある」²³と述べているように、単に表面的で写実的な出来事の描写であっても、それが特殊で想像力を必要とするような場合は出来事自体が神の業の具体的な表現であり、アレゴリーの一つとして受け止められたのである。アレゴリーは別の言葉では象徴あるいは記号ということができる。ベールをかぶった人物が弔いを連想させる姿によって死を象徴するように、突然の雷とともに怪我が治ることが神の偉大な力を象徴することになるのである。バロック期の文学では作品にアレゴリーが含まれていることが、その世界が現実ではなく虚構であることを示す一種の徴標であった。

しかし、ヴォルテールとマーニが代表するフランス派の意見は作品外の客観的基準で作品を批判することによってバロック的な奇想天外を否定する方向に進み、このアレゴリーを文学から排除するように働きかけることになった。ボードマーが反対の声を上げたのはまさにこの点に対してである。彼はバロック的アレゴリーを非合理的と排斥しようとするフランスからの声に反発し、アレゴリーこそが文学を文学たらしめる要素であることを訴えた。そこで彼が自らの論理を補強するために持ち出してきた新しい概念が想像力なのである。ボードマーは想像力を完成した一語ではなく、しばしば「想像力」Einbildungs-Kraft とハイフンを用いて二語からなる複合語として表記している。それはこの概念がまだ新しかったことであろうことを推測させ、同時にボードマーが使用に際して強調していたことも暗示している。想像力が適用される虚構の世界の特徴について、ボードマーは次のような指摘もしている。

²² Johann Jakob Bodmer: Kritische Betrachtungen über die poetische Gemälde der Dichter. Zürich 1741. Faksimiledruck. Frankfurt am Main 1971, S. 601. ここで「歴史的」historisch と使われている語は、単に「写実的」の意味で解釈するべきである。この時代は歴史と小説の違いが明瞭に定義されていなかった。なぜなら歴史に推測が多く混入していても思考によるとされ、また小説が創り出す虚構の世界も、本論で度々繰り返すように、現実と同様に神の統治下にあると考えられていたからである。

²³ Ebd., S. 605.

影のような取るに足らない人物たち、あるいは夢や脳が紡ぎだしたものと呼ばれる人物たちの実体をよく観察してみるならば、何について述べなければならぬのがよくわかってくる。失楽園の筋書きの半分以上が霊たちの目に見えない世界を舞台にしている、これについてわれわれが知っているのは、それらは矛盾や不可能からすっかり自由な、真の確立された自由を有しているということである。(CAW 144)

われわれの視点からすると、ミルトンの作品は半分どころかすべてが想像の産物である。ボードマーが、半分近く現実が描かれていると主張している点に驚かざるを得ないが、彼が現実と思えるものが含まれているとすれば、その現実とは何を意味するのかを考えてみる必要がある。『失楽園』に含まれる現実とはキリスト教の教義そのもの、つまり聖書に記された事柄と推測できる。聖書の記述は真実であり、そこに書かれてはおらずミルトンによって継ぎ足されたエピソードが現実を超えた領域を扱っていると言わんとしていると考えられる。そしてこの詩人によって独自に補われた展開こそが想像力の産物であり、現実のしがらみからは自由に、矛盾や不可能さえも内包しうる領域として立ち現れてくるのである。このようにボードマーは文学における表現の自由として道徳や科学からの解放を、合理性や秩序を超える可能性を主張している。しかし先に確認したように、価値のヒエラルヒーは文学の中でも守るべきであるという意見も表明しており、彼の主張には整合性がない部分がある。しかし18世紀半ばという時代を考慮すると、すべてを均等にラディカルに変更することは困難だったと推測でき、バロック的な世界観が近代合理主義へと移行する過程にあったことがわかる。われわれが当然のように考えている文学における自由は、神の業が現実の世界で起こったとする奇跡を描くスタイルを継承しつつ、その延長線上に人間が主体的に想像する力に目覚めることで、形成された近代的な態度なのである。

詩人がただ想像力に基づいて虚構の世界を構成するべきことについて、ボードマーは次のようにも論じている。

すなわち詩人が無を想像しようとするならば、詩人はこの無をあらゆるものから何かに作り上げねばならず、それに対してそこにあるかのようなものを付け足さなくてはならないだろう。そうする権利を詩人は職務上有しているものであり、無をあるものとして提示すること、つまりありそうなことがらを本当のように準備することはそれほど厚かましい態度ではない。というのも、ありそうなことがらはまだ起こっていないことであり、今あるものも以前にはありそうなことがらだったからである。(CAW 164)

詩人が作品として提示する筋書きを、ここでははっきりと「無」das Nichtsと断言している。ミルトンの作品は、聖書の世界という現実継ぎ足した想像の世界であり、それまでの文化的遺産を延長しながら紡ぎだした想像の世界であった。しかし作品の中では伝承とオリジナルは溶け

合い、一体となって独自性あふれる世界を構成することになる。そうして詩人は、まったく何もない段階から想像力を自由闊達に働かせ独自の世界を構成する職責と権利を与えられることになったのである。ボードマーは慎重しやかに前進しようとしているが、それは足が大きく滑って飛翔にも似た大きな一歩となっている。

4. 想像力論争と虚構観の形成

聖書の記述から類推を重ね、想像力へと発展させるという思考方法は、近代の虚構観の形成において発展の重要な一段階を示している。なぜならばバロックの時代までの虚構は、現実とは異なる世界であっても、現実と同様に神が支配する領域であり、神の力をアレゴリーによって表現するためのフィールドだったからである。それはいかなる混乱も全能者の業であり、いかなる不都合も全能者が一瞬のうちに解決していた領域で、あるがままに受け入れるべきものであった。ボードマーの想像力は、聖書の記述をより深く読み込むことで展開されている点では、敬虔そのものであり、宗教の権威に従順であるように見える。しかし想像力を働かせて類推しているという点で、つまりそれは自らの思考力を用いているという点で、独立した近代的個人の能力に発展しており、すでに従来への神の支配にとどまりきれない考える人間の姿が見て取れるのである。キリスト教的な世界観を参考にしている点で、ボードマーの「想像」はそれまで培われてきた共同体のイメージに根拠を求めていることがわかる。しかし同時に、これを足がかりにして、現世の法則に束縛されないイメージへと、つまり個人的で自由な内的想起へと向かうことを呼びかけている。そうしてそれが、彼の言う「文学が許す自由」として芽生えているのである。ボードマーの立ち位置は、本人の自覚では旧来の文化的な共同体イメージの範囲内にとどまっているつもりだが、独立した精神をもつ近代的人間へと境界を越えてしまっている。この自覚と実践の乖離した状況を見ると、彼の「想像力」概念は、バロックから近現代へのまさに移行段階に登場したことがわかる。キリスト教と近代的個人の自由な想像力は折り合いが悪い。なぜならば、キリスト教の教義では神がこの世のすべてを創造したことになるので、神の手が及ばず、ただ人間のみが勝手に振舞うことのできる領域が、神自身が創り出し支配しているはずの人間の中に潜んでいるとすれば、大きな矛盾となりうるからである。自然科学や商業・交通の発達などの近代化は、従来の社会制度の改変を余儀なくし、同時に宗教を含む文化的価値観も変更が迫られた。社会と人々の行動や思考は相互に影響を与え、それぞれの枠組みを発展的に変化させていった。とはいえ、キリスト教と反する「文学が許す自由」は、宗教への異議や反感といった反抗的な態度、あるいはそこまでいかなくともヴォルテールの姿勢にみられる合理的な判断からだけではなく、宗教への従順と恭順の姿勢からも発生したのである。

バロックのアレゴリーにどう対峙するかをめぐって、その克服と排除を目指すフランス派とより盛んに追及すべきであるとするスイス派は対照的な立場をとった。とはいえ後続世代の文学理論にいずれの意見も採用されている。先にスイス派の特徴2点について、つまり主体的な想像力

によって虚構の世界を神から奪取したことと、主体的な想像によって内面世界を充実させ、個人の役割を強化することで内面描写の前提となる独立した個人の誕生を促したことは指摘した。さらに、小説理論において合理的な筋の展開が求められるようになったことは、フランス派の持ち込んだ啓蒙主義の影響も混じっている。フランス派とスイス派は、対立して論争することによって、ともに新しい時代の文学観の形成に寄与したのである。

アダムとイブは知恵の実を食べてしまったがために楽園を追放された。この知恵の実について、『失楽園』では悪魔の目線から次のように語られている。

[...] 聞けば、すべてが必ずしも彼らの自由には
ならないという。味わうことを禁じられた、死を齎す一本の木が
知識の木と呼ばれている樹が、植わっているという。それにしても、
知識が禁じられるとは？ そんな奇怪な、そんな無法なことがありえようか？
なぜ彼らの主は知識を与えることを惜しんでいるのか？ 知るという
ことが罪であり、死である、とどうしていえるのか？ 彼らが罪に
墮ちないのはただ無知のおかげだということか？ それが彼らの幸福で
あり、服従と忠誠の証だということか？ ああ、それにしても、
彼らの破滅を謀るには、これこそまさに絶好の基盤だといわねば
ならぬ！ そうだとすれば、知識への欲望をさらに彼らの心に植え
つけてやろう、そして知識をえた暁には神々と等しく高く
なることを恐れて、彼らを低き者にしておこうという策謀から
仕組まれたあの猜疑に満ちた禁令を、拒否させてやろう。彼らは、
神々のようになりたいという願望に燃えて、あの木の果実を味わい、
死んでゆくはずだ。そうなることはもう目に見えている！ [...] ²⁴

知恵の実とは、一口食べると賢くなれる知識の詰まった実ではなく、知るという行為を意識させられるようになる契機であり、主体的な知識獲得への目覚めを促す転換点にすぎない。しかしこの認識の変化こそが悪魔の所業のもたらす結果であり、人類にとっては楽園を追われるほどの重大な罪なのである。この物語の中で、思考は神を超えようとする意志を芽生えさせるものであり、神への反抗を意味するとされているが、この理屈はそのままボードマーの想像力論に重ねることができる。虚構の世界で人間が主体的に想像することで、神への従順さを失ってその支配権を犯し、最終的に囚らずも打倒してしまうのである。ここまで分析したように、ボードマーは敬虔であろうと努め、キリスト教の枠組みの中に従順に留まろうとしていただけでなく、詩学の伝

²⁴ ミルトン、前掲書 189-190 頁。

統も肅々と継承しようとしていた。しかしわずかな解釈の変更が、合理的な判断のために追加した言説が、新たな段階へと彼を運び去ってしまったのである。それは本人も意識しきれなかったことであり、周囲もゲーテの記述にあるように明確に意識することがなかった。しかし現代から振り返るならば、遠く離れたがためにわかりにくくなった状況があることは致し方ないが、変化の潮目が浮かんで見えてくるのである。この変化はなぜ18世紀に起こったのだろうか。それはルネサンス以降の科学の発展や、啓蒙主義によっても宗教の権威への懐疑が進展し、非宗教化の流れが徐々に顕著になってきたためと思われる。宗教改革による個人主義の流れもここに重なっている。またなぜドイツ語圏で「想像力」についての議論が行われたのかといえば、今回の議論で取り上げたようにフランスとイギリスの議論を相対化して受け入れる立場にあったため、より客観的な見方が可能になったことも一因に挙げられる。また批判的精神が旺盛なので、外国の文化を受け入れる際にも考察が重ねられたから、さらに独自の立場を強調するために、元から親近性のあった内面性が強調されたからといった理由が考えられる。このように18世紀の詩学では叙事詩論で想像力の在り方をめぐって議論が展開された。そしてこれが小説理論の模範として参照されるようになったのである。